

河上肇記念会報

No. 4.
1977. 10. 20.

〒 530

大阪市北区梅ヶ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内、河上肇記念会

電話（〇六）三六四一六七七一
振替口座 大阪 三三一九五

特集 各世代の「私と河上肇」

特集にあたって

意外と云えば語弊があるが、沢山の玉稿を頂戴できた。三十数名の方に依頼状を差し上げ、以下がお送りいただいたものの全部、二十一編である。先ずは深謝申し上げる次第。

この特集は、次のような思いから試みた。

一、当会の創立は、河上直近の人達によるものではあるが、その継承と発展の支えは、もっと広範な世代と階層に移行されねばならない時期に来てはいないか。

二、現時において、とりたてて河上肇に深い関心を寄せていることの意味合いを、考え方や世代、階層の違いを超えて、素直に披瀝し合うなかでの相互の交流と研鑽が、「継承と発展」の実質形成とはならないか。

三、そのためにも会報の誌面は、思い切り広く開放されていた方がよいではないか。

「河上と自分」とか「自分のみた河上」とか云うテーマは、執筆者のいささか緊迫状況に追い込むものようであるが、しかしとにかく各位のひたむきな姿に打たれた。この事実をもって、本特集のねらいが、そ

の底においては叶えられたと思うのは、編集部の自惚であろうか。

（事務局 会報編集部）

『貧乏物語』を読んで

伊 藤 浩 美

まず最初に、私がなぜこの『貧乏物語』を読むことになったかということについて話したいと思います。

兄が大学で経済学を学んでいる関係上、私も家などで時々、初歩的な事ではあるが（インフレについてや、企業における利潤の取得の矛盾などについて）教えてもらっている。それで、経済を学ぶ上、勉強になり、私達高校生くらいに読みやすいのではないかとということで兄に勧められ読みました。

さて、知ってのとおりこの本は大きく、上・中・下の三篇から構成されています。

上篇では、「如何に多数の人が貧乏しているか」である。これを考える際、まず貧乏とは何かを考えなければならない。貧乏人には三通りある。第一は、金持に対していう所の貧乏人。第二に被救恤者を指す貧乏人。第三に経済学上特定の意味を有する貧乏人である。これで貧乏人の

大凡の定義がなされた。

そこで、中篇の「何故に多数の人が貧乏しているか」という問いかけに対してであるが、私が思うに、政治にしろ行政にしろ、大体的場合において、富者が権力をにぎり構成されている組織体なのだから、当然、自分たちの階級に都合よく調節することが出来る。だから、少数の金持ちとか権力者が富や財産をより多く得、多数の人が貧乏をしているのではないかと考える。しかし、これは私の考え方が偏っているのかもしれない。なぜなら、最近福祉なども強く叫ばれ、貧しさに苦しんでいる人達が救われている例もあるからである。

下篇では、「如何にして貧乏を退治し得べきか」の問いに対して、三つの対策をあげている。第一に、世の富者もし自ら進んで一切の贅沢を廃止するならば、貧乏退治の一策である。第二に、何等かの方法を以って貧富の懸隔のはなはだしきを匡正し、社会一般人の所得の著しき等差をなくすことができたならば、これもまた一策である。

第三に、今日の様に各種の生産事業を私人の金儲け事に一任し置くことなく例えば教育の様に、国家自らこれをするならば、また一策であると答えている。

今、この本を読んで感じていることは、まず、私たち戦後に生まれた世代には漢字の面で大変読みづらい本であること、これには、私もほんとうに苦労しました。それと、学校で習ったことの一部ですが、企業の社会的責任の事です。企業はただ単に、社会の需要を満たすだけでなく、そこで働いている労働者に責任をもつこと。不況になったから、すぐ弱い立場の労働者の首を切る。そうすると、よけいに生活できない人が増える。だから、企業は、公害問題等だけでなく、雇用問題も大いに考えなくてはならない課題だと思ふ。

最後に、この本をじっくり何回も何回も繰り返し読んですべて理解す

るということは、時間的都合で出来なかったが、機会あるごとに読み返して、勉強の参考にしたいと思ひます。
(十七才 高校生)

鑑三・肇 その見えざる落し穴

松井浩司

ここに、内村鑑三・河上肇という二人の人物がいる。内村はキリスト信徒、一方、河上は社会主義者(ここでは「マルクス・レーニン主義者」という意味である)として活動し今日もそれぞれの分野で影響力を有している。そこで、何のかわりもなさそうな二人の共通性をここでは見ていくこととする。

★

日本キリスト教の三大バンド、熊本バンド・横浜バンド・札幌バンドの内、札幌バンドの代表内村鑑三、この内村が日本キリスト教会に及ぼした無教会主義が、いまでも問題になっている。内村がキリスト信徒として、信仰の道を歩んできて、その結果打ち出された一つの立場が無教会主義である。その当時の内村は『聖書之研究』(聖書之研究社、明治33年(昭和5年刊))を発行しており、全国に多数の読者を有し教友会が出来るほどの状態であった。ゆえに内村の発言が多くの人に、簡単に影響をおよぼす事が出来、無教会主義という考え方も浸透していたものと思われる。

一方、河上肇は日本のマルクス経済学の開拓者として高く評価される一流の経済学者である。河上は『社会問題研究』(弘文堂他、大正8年(昭和5年刊))の発行を通じ、自己を社会主義者へと高め、しかも『社会問題研究』は当時としては異例とも思える発行部数を誇り、当然ながらマルクス経済学者?河上肇の影響力は多大なものであったと思われる。

★★

ところで、無教会主義には二つの流れがある。内村が唱えた「無教会主義」、内村の弟子が唱えた「いわゆる無教会主義」といわれるものである。特に後者の「いわゆる無教会主義」は一大勢力として台頭しはじめ、内村は自分の信仰とは違った考え方である為、たもとを分つ事となった。ここで、問題となるのは「いわゆる無教会主義」が生まれた原因である。

内村は神に救いを求めようとして歩んできた。その結果として無教会主義が生まれた。弟子達は、近くに偉大な人物である内村がいた為、キリスト信徒として神を求めるのではなく、内村を求めれば、おのずから救いの道を進めると考えた様に思える。正しかし、内村の道を進んでもたどりつくのは、神ではなく内村に行きつくのである。それも誤った認識をもって……。

★★★

それは、河上肇にもいえると思う。我々、青年労働者・学生がマルクス経済学を学習する際、河上に接し始め傾倒していき、本来の目標である社会主義を求めるのではなく、マルクス経済学者・河上肇を求めて歩む様になってしまう。それは社会主義者にはたどりつかず、河上にたどりついてしまう。それでも社会主義者として逸脱していなければよいが、多くの場合は、社会主義者とは懸け離れた存在になってしまう。

我々は神を求め、あるいは社会主義を求めて歩んでいるのである。それが我々の行く道にある指標ではないのである。いくら彼らが偉大であろうとも、彼らの歩んだ道は彼らのものであり、それを無理に行こうとすると、キリスト信徒でないキリスト信徒・社会主義者ではない社会主義者になってしまう「落し穴」がある。(文中、敬称略)

注：「無教会主義」と「いわゆる無教会主義」については以下の

文献を参考にしていただきたい。塚本虎二「内村鑑三先生と私」。

(二十四才 プログラマー)

河上肇の経済学思想

深 沢 明

私が河上肇という人物を知り得たのは、大内兵衛著『経済学五十年』(東京大学出版局)を通してであったと思う。それまで名前はおろか、あの有名な『貧乏物語』でさえも知らずにいたのである。

この『経済学五十年』を読んで、河上肇について印象に残っている。大内兵衛の河上観も含んでいる。河上が日本で初めて『資本論』を弁証法的唯物論の立場から体系づけ翻訳し(終局的には第12章までだったが)、マルクス経済学を公に示した事。また、ナイーブな物の見方、考え方を示し、純粹に経済学に取り組んだ姿である。さらに、これは河上の人間性であったのかも知れないが、ヒューマニズムの追求とそれのマルクス化であった点であろう。それでは以下に於いて、私の認識による所の日本のマルクス経済学と河上の経済学思想について見て行くこととする。

経済学指向は、とりわけ日本のマルクス経済学は労働派、講座派、あるいは改良主義派、と大別することが出来る。しかしながら、そのいずれもが政治主義的に支配され、マルクスが望んでいなかった方向へと傾いているように思える。まして、今日の経済情勢の中で河上の指向したヒューマニズム的な指向を加えた、マクロ的意味での経済学への取り組みが望まれているのではないだろうか？それは、経済学という基盤の上に立って、イデオロギー先行によることなく、理論のみに終ることなく、行動のみに走ることなく、人間の生活基盤から発生する自然な取組みを必要としているように思われる。

混乱しているマルクス経済学思考―近年、そう云わざるを得ない。それは、マルクス経済学思考を大衆化させるに至っていないと云う意味において、河上の思考したヒューマニズム的な思考が、光明をもたらす点になりはしないかと思うのである。その思考は、まず、マクロ的経済学思考が強まり、人間の内面思考深く入り込み、経済学を学ぶ欲求も深まるように思えるのである。つまり、『貧乏物語』を始めとした河上の著作がマルクス経済学思考を強め、自然な形での大衆化がはかれるのではないだろうか？そして、こうして示した、カテゴリーは早計にすぎるかも知れないが、河上の意図あるなしにかかわらず、主体的条件（マルクス思考経済学）と客観的条件（マルクス経済学思考への向けさせるもの）を統一的に蓄積していく必要のあることを説いているのではないのだろうか？それは、『日本の下層社会』・『女工哀史』に見られるような古典著書と共に我々に大きな問題提起をなしているのが、ほかならぬ『貧乏物語』であるからだ。（二十六才 教育労働者）

私の河上肇観

相 坂 邦 義

私は、戦後の食糧難時代に生まれこのかた大学を出るまで、河上肇先生がどのような人格者だったかということは余り詳しくは知りませんでした。ある年に京都大学経済学会主催の河上肇先生のことについて講演があり私は、河上肇に興味をもち各先生方のお話を聞いてそのあと、河上肇は非常に秀れたインテリゲンチヤであったと感じました。その段階は丁度、河上肇先生の人格に接する入口であったと自分は思い起します。それがきっかけで先生の本を集めてみようと思い、現在、先生の著作で、『資本主義経済学の史的発展』（弘文堂大正十二年）、『思い出』（月曜書房昭和二十一年）、『京都大学経済学論叢』（主に大正期のもの

）、『社会問題研究』（大正期）、その他をもっており私の最高の財産としています。そして法然院での河上肇先生をしのぶ会でいただいた梅千の種を今もなおかつ記念のものとして持っています。

次に、河上肇先生観について述べます。

河上肇先生のことを考えると、私は、すぐに矢内原忠雄キリスト者を対比させようという傾向があり、河上肇先生も求道者のヒューマニストだったことから、一面に於いて、キリスト的愛が、特に無産階級にあり、非常に東洋的精神面が断面にうかがわれると思いますが、私は、昭和前期の治安弾圧に、よく戦いをしてたえられたお方だ、よほど信念の強い人格者だったと確信しました。特に、河上肇先生の著作、『思い出』、『獄中日記』に強力なまでに先生が感じられました。思い出の中に、「大死一番」で、私がここに科学というのは、社会科学としてのマルクス主義のことで、その内容は誠にはっきりしている。しかし、私がここに宗教と云っているのは、キリスト教とも仏教とも、真宗とも禅宗とも、別に名の附けようのない、「純然たる我流のものなのである」と。

この引用箇所、非常に、河上肇先生の個性がよく出ている。河上肇先生は、目標を定められて、そして、それに忠実に歩まれた所に、先生の高貴なものを知らることが出来、幸福に思います最近です。

兎角、現代人の私の年代層は、余り信念を通す勇氣をもっていないのです。河上肇先生観との関係に於いては、私は、強い人生の生き方について感動するものがあります。（三十二才 会社員）

河上肇との出会い

河 村 敏 雄

「『吉田松陰の血を最も良く引いた長州人は河上肇だ』とおじいちゃんがよく言いつちかった」とか、「あの人は正直すぎたから、学生に

だまされちゃんだ」というような言葉が祖母と伯父の間で交わされたのか、それとも自分に向かって言われたのだったろうか。

敗戦の年の一月に海軍に居た父を喪い、翌年十月母がその後を追ひ、亦、徳山の実家が燃料廠爆撃の折に焼失したため、母方の祖母に養育されることの多かった幼少年時代の想い出の中のことです。

母方の祖父が中学・高校(?)・大学と河上肇と同級生であり、その後、長野県の松本での教師時代やその後東京に住んでいた折も交友があったらしく、祖父の没後、祖母から断片的に聞かされた中で、記憶に残っている言葉です。

「吉田松陰の血を最も良く引き」「正直すぎる」ということが、どうして「学生にだまされる」ことになるのか、「正直すぎる」ということがどうして悪いのか。

このあたりが自分の物を考え始めるきっかけになったように想われます。

高校を出て、受験に失敗し、結核に罹り、祖母の許で療養していた時に、丁度「岸信介」氏が首相になりました。

忘れもしない、「三悪追放」——「貧乏・汚職・暴力の追放」とやら……。

このことが彼の「戦犯経歴」はものかわ、久方振りの「郷土出身の宰相」ということで鳴り物入りで喧伝されました。

その頃の話し相手に十才上の山口経済専門学校出身の人がいました。私の住んでいた家の隣の特定郵便局長でしたが……彼が言うには「三悪追放が出来るわけではない」と。

余りにも確信ありげな言葉に反駁したところ「まあこれを読んで見ろ」と示されたのが『貧乏物語』でした。

田舎の村で民生委員をしながらも、保守党に投票する祖母を警戒しな

がら渡された様にも想いますが、そのことから先に書いたような話が出てくるようになったかと思えます。

折が折、岸信介氏に代表されるような山口県人とは全く違ったタイプの山口県人……。

このことの青年期の印象は強烈だったのでしょうか。

(四十才 高校教諭)

姿なき河上肇先生との対面

千葉哲郎

「およそ学に志す者は才の乏きを悲しむなかれ 努むることの足らざるを恐れよ」

——中略——

「君ねがわくば所志を一貫して天の負托にそむくなかれ」

——大正六年夏七月十三日 京都に於いて

河上肇

右の言葉が、私の書齋にかかっている。拝見する度に「努めることの足らざる」自分を恥じ、私は自責にかられている。そして、「天の負托にそむかぬように私は自戒する毎日である。」

「天の負托」とは何か。それは、自己の生存の世界的使命のことである。

自我として人間は孤独であるが、生命として人間は自我を超えた世界的あるいは宇宙的連帯の意味をもつ。そのことを自覚して生存の意味を最大限に生かすよう、細心に行動して生きよ、ということである。

人にはそれぞれ、生まれながらにして与えられた天命がある。ただ、人によっては、その天命を発見せずに一生を終わることがある。その天命を発見し、その成就に努めよ、ということである。

それぞれ、と言っても人間の営みである以上、人間問題に、それも普遍的人間問題に回歸するのだければ、生命的価値がないし、そのような普遍的人間問題に最大限に回歸する生き方を努力して進めよ、ということである。

そのような生き方は、人類愛に結びつく生き方であることは言うまでもない。

そのために、お前はどれだけ努力しているか？

河上肇先生の言葉は、このように私に問いかけてくる。これに対し、私はただ涙と自責の念で答えるばかりである。

およそ、心ある人ならば、河上肇先生の言葉を、涙と自責の念なしに読むことが出来るであろうか？私は否と言いたい。

今日の日本国憲法は、第十九条で思想及び良心の自由を、第二十一条で諸表現の自由を、第二十三条で学問の自由を規定している。

だが、河上肇先生はこれらの諸自由がない時代を生きたのである。このことを忘れたくない。

今日の社会は、まだまだ不平等、不当搾取、愚劣が横行する社会であるが、先人の苦闘があつてはじめて今日の比較的安楽があるのだということ、新しい時代の人間はもっと自覚しなければならぬ。

故河上肇先生の霊の、そして高弟、故菅原昌人先生と故末川博先生の霊の安らかでありますよう、切に念願申し上げます。

河上肇に思う

大野春光

春の叙勲ということで、受勲者の氏名が、紙面を埋めていた。そういう記事には、むかしもいまも、全く無関心なので、広告のページと一緒に捨ててめくっていると、そのいっばい並んだ活字の中から、どうい

うわけかただ一つの名前だけが、むこうから眼の中にとびこんできた。

それは、最近出版された人名辞典にもついている、ある高名なマルクス経済学者の名前であった。河上肇の直弟子で、戦争中天皇制権力の弾圧をうけた経験もあると聞いていた。昭和二五年頃、大学に入ったばかりの私は、円山公園の野外音楽堂で、大山郁夫氏や末川博氏やその人の演説に感動し、終電に乗りそこねても苦にならなかった記憶をもっている。

私は、現在勤務している高等学校で、十数年も前から、その人が編修者の一人として名を連ねている教科書を使用してきた。私がその教科書を長年使用し続けている理由の一つは、確実にその人にあった。

人には、現実生活の上でどんなに妥協を余儀なくされても、これだけはゆずれないというものがあるはずである。他人からみたら大したことではないように思えることでも、当人にとっては、時には「いのちがけ」で守らねばならないことが……。そういうひたむきなものが多くの人の心に深い感銘をきざみ込むのである。

私達の学生時代には、そんな人生をいくつか知らされた。河上肇はそこの中でも特に際立つ人生だった。「貧乏物語」か『経済学大綱』ぐらいしか読んでないせいか、私にとって、河上肇は、マルクス経済学者であるよりも人生の教師であるように思える。

高名なマルクス経済学者の春の受勲は、私には人生のいやらしい裏面をみせつけられた思いが、つよく残るだけだった。地下の河上肇はどうみているだろうか。

ロッキード疑獄の橋本登美三郎が「悲母観音」堂を建立していたという。そういえば、金をしたまもつけ、酒色に興じ、田舎の利権政治に手を出していた私の伯父も、一方で寺社の修復建立にえらく熱を入れていた。そして、人々からは信心あつい人と思われていた。私の教えにそ

むく現実のおのれの姿を直視することをおそれ、それだけ一層仏を語り、仏に頼ろうとするのであろうか。

河上記念会は何だろう。その存在を今度はじめて知った。S君からは老若交歓(?)のようなことを提案されてきている。しかし、河上肇を語り、河上肇を偲ぶことで、河上肇の生きた人生とはひどくかけはなれた自分を、安易に許す結果にならないようにしたいと思うのだが。

(四十五才 高校教諭)

河上肇が教えるもの

市川三次

私は河上肇先生を全く知らない。ある春の日、農学部から吉田山を越え、東山にそぞろ歩いた時、「河上肇」の墓標を見あげた。そして春の花を摘み、そっと捧げた。これ限りである。私が河上肇と出会ったのはこの墓標のみである。そしてまだ河上肇を識らない。

その後、彼の遺品展を観た。京都府資料館で、復元された彼の居室の中に理解できぬものを感じた。彼は帝国大学の教授である、奏任か勅任の教授である。豪壮な住宅に書生・女中を置いた姿が、その頃は時代にふさわしい帝大教授であつたにちがいない。

もちろん、その外形は内実を伴なつたものであつたろうが、河上肇における帝大教授の外形は河上を慕つて集まる全国からの学生ではなかつたのだらうか。勿論この数だけではない。河上門下の英才・俊才も数多い。

河上肇の帝大教授における内実は何だらうか? 門外漢で無知の私はそれを知らない。その講義も、彼の啓蒙も残念ながら、まだ不勉強で知らない。思想性故に受けた弾圧もその後のことも年譜からそれを知るのみである。しかし、彼のその内実は、いわゆる象牙の塔の内部や彼の肉体の内部にのみ存在していたのではなく、その門下を通じて現在もなお

生命を維持し更なる発展を伴っていることを知る。彼は弾圧で、言論も、その学問も封鎖され、肉体もついに潰えたとはいへ、その内実が現在に生きているのは、それが「真理」だからなのであつたと考える。河上を知らぬ私には河上を論ずる何物もない。

別して、私の興味をひくのは河上龍免にいたる大学内部の動態である。勿論、何も知らぬ私の野次馬趣味みたいなものだが、教授会権限が、かようにもろく崩れるとは思えない。時の教授がオポチュニストになり下つたからであらうが、彼等をしてオポチュニストにさせた顕潜交々いたる力が、どの様な形で河上に迫り、教授会に流れ、大学当局に至つたかこれを解くものを知りたい。

私の曾祖父の父(市河寛斎)は昌平黌の学頭までしたが異学の禁でその職を逐われた。学問とはかように時の政治に支配されるものである。か。時に迎合する者は独善でも許容され、時に逆らう者は衆をうけても排除される。

河上肇に迫り、遂に獄に縛するに至つたその力を、今、克明に残し公けにせねば、ひそかに聞こえてくる軍靴の足音に対処できぬのではあるまいか。

(四十七才 中学教諭)

妙好人と河上肇先生

小西輝夫

私が河上肇先生の名前をはっきり意識したのは、浄土教一とくに真宗一の篤信者である妙好人の信仰の心理を精神医学的立場から解明しようとして、ささやかな研究を進めていた十数年前のことである。妙好人を現代において再発掘した人たちがたとえば富士川游、鈴木大拙、柳宗悦ら一の一人として河上先生を発見したのであつた。しかし、河上先生を除く他の人たちがすべて妙好人を礼讃されているなかで、先生だけは妙

好人を「民衆の反抗を眠りこますための道具」（『獄中贅語』）と化した教団としての浄土真宗の「阿片性」に育くまれた人間像として鋭く告発されていたのである。その小気味よさに妙好人派の私も魅せられ、以来入手可能な関係図書はむさぼるように読みふけたが、何といても『自叙伝』が圧巻だったことはいまでもない。

その中で精神科医としての私をもっとも関心をもったのは、無我死入りの直後に先生がもたれた例の「奇異なる体験」であった。それはドストエフスキーが名作『白痴（イジオット）』のなかで、主人公ムイシキン公爵に仮託して記載した彼自身のアウラ（てんかん発作の前兆）体験とそっくりであった。そのことに気付いた私は『自叙伝』を詳細に読みなおし、それを一般資料として「河上肇の「奇異なる体験」について」という論文（『神戸大学医学部紀要』第34巻、第3号所収）を書いた。

論文執筆途中の四十七年四月、広島での学会に出席した私は足を延して桜満開の岩国にゆき、まったくのゆきずりに飛びこんだ市の図書館で市史編集嘱託の大岡昇氏と出会い、氏の案内で河上先生の生家を尋ねることができたのである。その大岡氏が江戸末期に刊行された『妙好人伝』の原本を持っておられたことは一つのエピソードであった。その翌年、私は初めて河上先生の墓前にぬかづくことができた。法然院の杉の木立の残雪が清々しい一月三十日の朝であった。いうまでもなく先生の祥月ご命日である。帰途、鹿ヶ谷をおりて百万遍にいる妻の叔母を訪れたところ、叔母が河上先生の次女芳子さんと錦林小学校では同級生で、下校時にはよく手をつないで帰ったことを聞かされ驚いた。

その後出来上った前記論文の別刷を、かねてより敬愛する日本のすぐれた精神病理学者荻野恒一博士（東京都精神医学総合研究所）に献呈したところ、博士の令夫人が河上先生のお孫さん（羽村二喜男氏の長女

）であることを知らされ、これまた飛び上るほど驚いた。それを知っていたら、とても私は河上先生の病跡論を書く勇氣などなかったであろう。

因みに前記の富士川游氏は大著『日本医学史』の著者として有名であるが、氏のもう一つの名著『日本疾病史』の平凡社版（東洋文庫）の解説を執筆されているのは松田道雄氏である。同氏の嚴父道作氏が河上先生のホームドクターであり、河上先生が夫人の父君を京都駅（七条駅）に送って待合室で持病の胃癌（私はこれを行かん）の異型である自律神経発作でないかと考えている）をおこされたとき、担ぎこまれた旅館に往診に駆けつけられたエピソードは、河上フアンなら知らない人はいないであろう。その道作氏のすぐれたあとつぎである道雄氏が妙好人に關心をもたれ、『広辞苑』（第二版）に妙好人のことがのるのに努力されたことを知る人は少ないと思う。

このようにみえてみると、妙好人を発端として私は河上先生と深いえにしに結ばれているといわざるをえないのである。これを仏縁と呼ぶことについては、河上先生もお許し下さるのではあるまいか。

（五十才 精神科医）

河上肇『自叙伝』と私

広岡正次

河上先生の『自叙伝』を読ませて戴くことによって、私は心の持ち方、ひいては生き方に指途を与えられました。古本屋ですから何時も本に埋もれています。手近にこんな宝物があるとはいまさらながら良い仕事を運んだものだと思えます。本を読むことの有難さ、汲めども尽せぬその深さ、これから死ぬまでもっと本に埋もれようと思うのです。

河上先生へと導いて下さったのは田万清臣先生です。そして法然院の法要に参じ末川先生をはじめ諸先生方とお食事を戴き、皆様より在りし

日の河上先生の片鱗を伺う楽しみに浴しました。其の後先生の難しいものは別にして、入手出来た著作や日記、評伝など読めば読む程先生への念が深くなって来ました。

先生は純粹無垢の人類愛を中心として絵での人たちが救われる理想社会への道を、何度につき当っては次々に障害を乗り越え、遂に理論を極められた。そして実践へと踏み出されました。自分を実験台にされたのではないかと思います。自分に出来ることであれば他人に勧めることが出来る。先ず身を挺してぶつかると。その雄々しさ、強さ、帝大教授を辞職せられ、遂には下獄される。時に先生は五十四才、私も同年です。冬の夜、獄中の先生を想う時たまたま足りな気がします。もっと仕事に打ち込まねばと、又どんなに苦勞をしても足りないと思うのです。モン・ブランの峰よりも高く積み上げられた資料、そして半生をかけ追求思索せられた結果の理論と信念はこれこそ人類を救うものである。そして河上先生はそれに命をかけられました。身辺の清潔なこと、「人間とは人情を食べる動物である」と云われる先生、夫婦愛の美しさ、お嬢さんのこと等々人間河上先生への傾倒はいよいよ深くなってゆくのですね。

死の直前「同志野坂を迎えて」の詩を揮毫する時、現在の日本はどんなものであろうかと思ひます。宇宙の中の地球そして人類、その人類の永続発展を考へる時、大気と水を昔のように美しくもどし度いと念ずるのです。公害という言葉は何か他からの不可抗力の機に聞えますが身近には喫煙の排気ガス、吸殻の後始末、小国日本に多すぎる自動車等々は我々自身が止めれば無くなるのです。明らかに私害であります。すべて機械に頼りすぎると人間は何をすれば良いのでしょうか。健康維持のためにも肉体労働は必要ではないでしょうか。エネルギー源としての石油使用を節することは地球を美しくすることだと思ひます。

考へに行き詰まったり、もやもやした時は『自叙伝』と『日記』に帰

ることにしています。晩年の「日記」も読めば読む程良いものです。

(五十四才 古書齋商)

私と河上肇

和泉とく

私は年令五十五才の東北秋田に住む平凡な主婦です。河上肇に私淑して数十年、私の精神的な背骨となっている河上肇像です。

小学校時代に忘れられないことがありました。色白の楚々たる美人で矢継の着物のよく似合う日先生が或る日突然教え子の私たちの前から消えました。宿題の綴方をみてもらう楽しみで登校した私でしたのにやさしい先生はみえませんでした。そんな時、教室に風のように現われた人がありました。それは学識も深く高潔の士として尊敬されていた村長で、美濃部達吉の天皇機関説に発狂した老人です。日先生の教卓に立って大声で天孫降臨の神勅を唱えて私たちの度胆を抜いて立ち去りました。この時私をはじめてきたマルクス主義、共産党ということばでした。

女子師範を卒業した頃です。発行所も忘れましたが、『風雪の碑』という共産党弾圧の本を手に入れました。拷問死した岩田義道、小林多喜二の写真などのある紙質の悪い本でしたが、長い間気になっていた日先生のことをわかりかけ、その解明の延長で河上肇にたどりつきました。

農村の教師として児童の貧しさをとおきに見ました。子ども達は黙したまゝ子守に女工にそして満蒙開拓義勇軍になりました。『貧乏物語』によって資本主義の発展に伴って貧しき人々の群れの出現を知りました。貧乏の解消法の一つに贅沢の禁止をあげていますが、私の教え子は贅沢どころか赤ん坊を子守しながら学校にくる子供もある状態でした。『貧乏物語』は読んでいただけ貧乏な教え子には何もしてやれませんでした。それはやけどに油薬をつけてさすってやるぐらいのものでした。『自叙

伝』の中に秀夫人が病死された長男政男さんのことにふれ「あの子が生きていたらあなたはこのようなことはなさらなかったでしょう」と述懐されたとありますが、私も病児をかかえて必死に生きなければならませんでした。

昭和二十八年の頃、私が転勤した村ではそれまで選挙の度に共産党票は一票だったのに私が岩間正男に投じて二票になり話題になりました。この頃はじめて地教委ができ辞令は市町村教委から出しました。何かしなければのうしろめたさと生計のための保身にやり切れないものを感じ続けた私には京都帝大の象牙の塔を出て実践運動に入られた河上肇に大きな尊敬と同情の感を抱き続けました。

もしも、河上肇が健在であつたならこの世相、日本共産党などについてどんなことを書かれるでしょうか。この度の参院選にはやはり共産党に一票を投じましたが何か違和感を感じます。懐しのメロデーに昔をとりもどすように河上肇のころの往時を思うこの頃です。

河上肇ならあのよどむことを知らない名文で今のようにむやみに外来語をつかわないで私のような者でも外来語辞典なしに読める文で痛烈にお書きになると思います。

例えば『自叙伝』にある外来語はセンセイション、ポケット、チョッキ、コンクリート等々それに外国の地名人名などです。擬声語、擬態語はカタカナです。あまりに多い外来語の氾濫に反感をもっている私には河上肇の文章に感謝と敬意を表します。

去年四十年ぶりに上洛し法然院に詣で積年の思いを果たしました。今春息子を立命館に入れたのも河上肇、末川博の流れを思いその流れの小石の一つになつてもらいたいの念願でした。愚息は一昨日帰省し法然院に墓参してきたと報告してくれました。休み中に『自叙伝』と『貧乏物語』を読むといつて本棚からさがして来たのを見て河上肇について母子

の流れができたと思いました。味噌汁を吸う毎に秀夫人の留守中に配給味噌をもらいに行き多目にもらつてよろこぶ詩を思い出します。私の生活の中に河上肇は生き続けています。
(五十五才 主婦)

私と河上博士

曾 我 ま り

古本屋で見つけた『貧乏物語』二巻が、河上博士を知ったはじめてです。とはいふものの、十六や十七の女の子に到底理解出来る内容でもなく、有名な本を珍しがって買い、あちこち拾い読みをしたという程度で、それでも今開いてみると、子供らしい書きこみなどもみつきり微笑ましくもなります。そんなことで、読了したという記憶は全くありません。

四十才を過ぎてから、人に借りて読んだ博士の日記に、大変感動いたしました。特に獄中の博士の状態が悪くなられて、それにつれて心も弱まられることを心配された夫人が、恩赦など受けぬようはげまされるくだりに、涙の滲むほどの感銘を受けたのでした。世のどの妻が老いた夫を獄に置くことを希望するでしょうか。しかも、あえてそれを望まれ、また博士がよく夫人の意を理解されるところで、悲しいほどの感動を受けたものでした。

本来私は、内助の功という言葉が好きません。男性の側から見た妻のありかたという限定された見方がとても嫌なのです。男女同権などという借りものの浅ましい言葉ではなく、夫も妻も人間という意味では全く同一線上にあるものと思えますし、そうした立場からは、内助という言葉には様々な異和感があると思われるのです。

ただ、河上夫人の場合、単なる内助と呼ぶようなものでないことが感じられます。すこしも表だため行動のなかに、何という強い一本の芯が通っているのでしょうか。これはもう内助などというものではなく、

博士の肉体を借りた夫人の意志だという気がします。博士も立派なら、夫人もまた、真の尊敬に価する方だな、と深く思ったことでした。

経済のことなど、何も知らぬ平凡な主婦なので、むづかしい理論には弱くても、難解なマルクス理論の学者として知ってはいても、遠い人ではなかった博士とその夫人とが、急に身近く感じられるようになり、法然院附近を友人たちと歩いて御夫妻のお墓を見たとき、「日記を読ませて頂きました」と御挨拶せずにはいらぬ気持ちになりました。

博士の生きてあられた時代の庶民のありかたを、現在はずいぶん豊に、安楽にちがってきて庶民貴族の様なことになりましたけれど、だからといって人間が幸福に溢れているとはいささかも思えません。上すべりした浅薄な国に傾斜してゆく日本を眺めているのは、あまりよい気持ではありません。平凡な日々の幸福を願う一方、こんなことでいいのかなあという不安を感じてもいる一人なのです。選挙などでも、いつもこんなむなしさを感じつつ、やはり佻しい一票を投じては、その結果に白々しい失望を感じる一人でもあります。

でも、どこかで、まだ古本屋を漁る若者がいて、博士の日記などみつけて感動する姿をも、思い浮かべずにはいらぬ一人でもあります。

(五十七才 主婦)

河上肇と『自叙伝』

橋 本 勲

河上肇先生の本をはじめて読んだのは大学一年生のころの初冬、十二月であった。『経済学大綱』であった。当時、戦争中海軍の御用商人として産をなした大邸宅の一隅で書生々活をしていた。庭の掃除と風呂焚きをして、やっと雄炊やイモ弁当にありつけていた頃、夕方の風呂焚きが余りにも退屈であったので『経済大綱』をもち出して、風呂の釜口に

立っていた。したがって、「読んだ」といっても経済学のロゴスはさっぱり頭に入らなかった。ただ、戦争で財をなした御用商人と生活に追われる一書生との貧富の懸隔の差を、師走の風に耐えながら身に沁みて感じていた。ロゴスは兎に角、不平等に対するパトスらしきものが残った。しかし、翌年からどうしても『資本論』に取り組もうと決心した際に、一つの動機になったかもしれない。

河上肇のパトスに真向から打たれたのは、やはり名著『自叙伝』を通じてであった。大学を出た頃であったが、文字通り、夜を徹して、一挙に読み通した。というよりもやめられなかった。「日本一」といわれた名文もさることながら、その内容と迫力に圧倒されたのである。まさに悪戦苦斗の求道の斗士であり、真実一路の斗争の戦士であった。最後のページを読み終ったときの感銘は、今もあざやかである。

爾来、多くの学生諸君に一読を奨めたり、貸したりした。古今東西の自叙伝中の巨著であると思っている。『荒畑寒村自伝』も実に多彩で面白い。『山川均自伝』もいおし銀のようなきらめきがある。しかし、その迫力において遠く及ばない。

『河上肇自叙伝』の迫力がどこにあったかは、そのとき、そのときによってニュアンスが違ってきているように思われる。はじめて読んだ戦後間もない頃の河上肇像は、風雪二十年を耐え忍んできた苦節の学者であり、勁草の思想家であり、榮譽ある戦士であった。まさに、偶像であった。しかし、絵にかいたような超人にしては、余りにも赤裸々な自叙伝である。その赤裸々な率直さ故に、光を放ち、胸を打つものがあったように思われる。どこで胸を打たれ、どこで感銘したかは、一言に語ることができない難しさをもって、今も問いかけてくるものがある。

*

*

*

河上先生について

佐藤 洋

私は石川県の小松という町で生まれ育ち、昭和五年に金沢の四高に入りました。読書会（RSと称した）に誘われ、ブハーリン『唯物史観』や『無産者政治教程』を読みましたが、事件が起こって多くの上級生が退学になり、読書会もばれて指導教官に呼び出され、家から汽車通学させられる破目になりました。

ところでブハーリンには知的関心をそそられましたが、政治教程は呑みこみ難かった。河上肇『貧乏物語』を友人に借りて汽車の中で読んだのがその頃でした。ロントウリーの貧乏線とかローレンツ曲線などというものに、いたく興味をそそられたことを記憶しています。不景気な時代で庶民の生活は悲惨でした。中学の終り頃、若い教師から島崎藤村『破戒』、ストウ夫人『アンクル・トムス・ケビン』などを与えられ、大変なショックを受けたこともあって、『貧乏物語』に感激しました。マルクスの写真もこの本で初めて見たと記憶しています。ともかく政治教程よりは面白く読み進んだことは間違いありません。

昭和八年、東大経済学部に入りました。拘束から解放されましたが、講義も面白くなく本所の東大セツルメントのレジデントになりました。しかしすぐ滝川事件が勃発し、経済学部高代会議の四高代表をやらされ十月、十一月は本富士警察の豚糞生活を余儀なくされました。新しく出来た友人たちと「勉強しよう」ということになり、『資本論』と『日本資本主義発達史講座』を主として読むことになりました。アドラツキ版の原書が入手でき、ローゼンベルグ『資本論註解』も出版され、この方はかなり進みました。河上先生の『経済学大綱』『資本論入門』『第二貧乏物語』を買い求めましたが、それをどのように読んだのか細かいと

ころは記憶がうすれています。野呂栄太郎、山田盛太郎、平野義太郎、羽仁五郎、櫛田民蔵など読まねばならないものが沢山ありました。

私たちは戦前派の一番最後の世代で、いつも余剰のくすぶる中で彷徨っていたのではないかと思います。昭和八年の初頭、河上先生の検挙、小林多喜二虐殺、その前年に五・一五事件や大森ギヤング事件。「三二年チーゼ」は大学へ入ってから入手しました。とにかく大変な時代だったと思います。河上芳子さんのことも話題になりました。私たちは、日本資本主義論争やマニフアクチュア論争や中国問題に心を奪われていました。そして河上先生は遠く獄中に居られ、時に洩れつたわってくる情報に身の引きしる思いをいたしました。

戦後、故里で『赤旗』にのった先生の詩を読んだ時は、一入の感慨に打たれました。労働組合の組織活動をはじめて、勇気百倍したのを覚えています。私は河上先生にお会いしたことはありません、遠い存在です。ある意味では畏るべき存在でした。

最近、河上肇研究が活発になってきているようで何よりです。学説批判、思想的的研究について二、三の本を読みましたが、それよりも当時われわれに与えた先生の行動や人格のインパクトはもっとと大きく広汎なものではなかったかと思われまふ。東大では曲りなりにも聴いたのは大内先生の農業政策だけ。社研の方がわれわれには重要でした。

河上先生が獄中に居られるということが、われわれに大きな影響を与えていたことは否定することのできない当時の事実でした。

紙数が尽きましたので拙ない文章を終わります。記念会の発展を祈ります。
(六十四才 桃山学院大学教授)

河上教授室と私

田 中 真三郎

法学博士河上肇著『中等教育経済教科書』（永沢金港堂版）これが長兄の大事にしていた薄い教科書で、大正後期に私の知った河上先生でした。他日文学青年の放浪生活を送った私にはすぐく名文と思われたが、よもや毎日先生に接してお声を聞ける身とは。

京大経済学部研究室の給仕、図書室勤務というが昭和三年一月―昭和六年一月まで主として教官付となり、河上教授室は何となく入り易かったたのでお茶を差上げる毎に優しい言葉をいただいた。「将来何になりたいか。」「政治家になります。日本に革命を起こします。」「君は教員になったがよい。私はそう思う。」「これが私の一生を決定した。長兄が『偉い人だ、『貧乏物語』を読め』と心酔していたものです。短日月であったが先生が辞職を決意せられた前後は生々しく記憶にある筈のところ、往時茫々五十年、断片的で定かでない。

教授室には、大きなアダム・スミスとロバート・マルサスの肖像が壁間に飾られてある。長身制服の先生は講義から飄々と帰来、ゆっくり一服される。この僅かな時の会話が縁で教員検定の参考書代として金五円也を頂戴した。石川、作田、とくに谷口助教授には文検合格のため物心ともに励ましをいただいた。この河上教授室は当時在外研究中の谷口吉彦博士が恩師退職後のゆかりある室にやがて教授として入られ、不思議のご縁で私が京大文学部入学の昭和八年四月より拾われて教授室秘書として一年余、再び出入することになる。英国製の赤煉瓦の中庭つきの建物ではない。滝川事件の頃、末川先生が来室、懐しそうに眺めながら厳しい顔で谷口教授と握手しておられたのが眼に浮かぶ。河上教授退官前後と末川教授や八木、谷口、蟻川助教授の当時の活動とが混同するの

で困っている。経済学史系の蔵書など谷口教授室に引継がれていたように思う。私の書齋には、先生の肖像をはじめ初期の転貸散逸した一部をのぞき、恩師の著書は殆んどそろっている。応召中は長兄宅に預けたので他の所謂、多くの危険図書と共に幸いに押収を免れた。

南禅寺金地院に居候できたのも先生の間接のお蔭であり、特高や川端雪、松原署の連中も訪ねてきたが下獄中の先生に敬意を払って態度もていねいであつた。

先生は少年時代の私を可愛がって下さったが、晩年にはご記憶になかったかも知れない。幸いにご指教どおり教員三十余年、中学校長を退任しても再び翌日から母校の事務部長に招かれ現在六十四才に到るも元気で生きている。

私の中には脈々生々と先生のお心の一部が生きていると信じ自戒している。この間従軍二回、但しいつも兵卒として奉公。戦争に反対し、祖国を憂慮された先生の心は多くの青年に生きていたが、敢えて拒否して投獄されるか、戦場で死ぬるか、当時の絶対君主制下では後者をえらぶ他なかったのである。河上先生、当時の兵隊も弾丸は勿論、食糧も実に乏しいものでした。監獄なみ、いやそれ以下でした。泉下に在る先生、この点ほど訂正ください。

先生が監獄で褒美に腰高まんじゅうの山盛を賞味された頃の娑婆では統制で小豆も砂糖も手に入らなかったのです。今や金次第で、虎屋のまんじゅうでも越後屋、多鈴堂のカステイラでも自由に頂けます。たゞ、戦後三十年、いまだに回復しないのが、道義人心の荒廃です。私の教え児たちは戦中戦後の飢餓児童や生徒ですが、いま四十余歳の男女、祖国の二十一世紀はこの人々に期待するのみなのです。

（六十四才、高等学校事務部長）

河上肇博士と私

— 恩師を通しての思い出 —

田 村 茂 雄

私は、私の恩師のように直接恩のかかった弟子というわけでない。博士について書くことは柄でもないと思ったけれども、私の中にも、いささか私なりの思い出もあるので、拙文を顧みずそれを述べてみたい。

私は昭和の初期同志社の学園にあった。当時は、大正デモクラシーのつかの間のよき時代も過ぎ去り、デフレ、恐慌、失業、戦争の危機に一步一步と近づく昭和ファシズムの真ただ中であつた。

私は中京区の商業学校時代に経済学の初歩を教えられ、「エコノミー」の言葉、スミス、リカルド、マルサス、ミル、マルクス等また京大の河上肇博士の名を教えられ、はるかなる恩慕をよせたのであつた。その後同志社に進み、法経学科の教授陣に今中、中島、恒藤の新進気鋭の教授、林、住谷、長谷部他進歩的教授のあることを知つた。当時は、同志社大学法経学部は同志社アカデミーの黄金時代であつたという人があつた。正にそうであつたろう。進歩的自由主義、啓蒙思想の洗礼をうけ、学生達も向学心にもえていた。河上博士と親交のあつた恒藤、林の両先生と住谷先生（ユニークな河上肇伝の著者）、直弟子の長谷部先生から社会科学にとりくむ態度、姿勢、社会発展の法則、学説の歴史性、階級性等教えられ、私の将来に指針を与え、人生如何に生くべきかの哲学を教えられたのであつた。

経済学といへば当時経済思想史、学説史であつて古典派、折衷派、何々派と区分し、その主な学者の学説の紹介なり、之に対する批判等であつた。住谷教授は、その得意な学説史をマルクスの立場から発展的に解明され、先生の教室は超満員であつた。先生は河上博士に私淑され、博

士の初期からの著書、文献にはもらさず目を通してゐる旨語り、（その「唯物史観より見たる経済学史」は博士の命名）又、博士の長男政男君が同志社予科に在籍中惜しくも病のため倒れたが、その家庭教師をした英文学者秀岳先生からきかされたかずかずの逸話等を授業の間にはさんで話し、教室のかたい空気を和げたり、又柳田民蔵（かつて同志社大教授）と博士の資本論論争で、博士は自分の説に誤解があればいさぎよく撤回訂正するに吝でなかつた態度は、真理を愛し、学に志すものにとつて最高のモラルであると述べたことは今も忘れ得ぬところである。私にとつて博士は高い存在であつたが、上記恩師と著書を通し、ますます尊敬の念を深めたのであつた。却つて遠くより眺めている方が、比較的公平な批判觀察ができるものでないかと理解している。

丸太町の「弘文堂」、三条菰屋町の旧「丸善」で求めた諸著書は半世紀以前のものになるが、時々机上にとり出し、シミの入つたページをめくり郷愁にかられることがある。博士の『自叙伝』は伝記文学の白眉である、また博士の漢詩の教養は経済学者中拔群である（大内博士）と称えられている。私は恩師の健康を祈り、博士の著書を座右にして余生を送りたい。博士と恩師、同志社は私の青春時代そのものであつた。

（七十才 公認会計士・税理士）

私の生き甲斐と河上肇先生

岩 城 牧

私は河上先生に直接お目にかかる機会はなかつたのですが、一九四六年十二月の或る日、父に同道して、吉田のお宅を訪問したことがあります。

先生は、病床についておられたのですが、秀夫人やお孫さん方にはじめてお目にかかりました。

その頃、私は肋膜炎の病後で、おくさまは私の身体を案じて下さり、ご自分の黒い毛糸編みのショールをお貸し下さいました。

私どもは、空襲で焼け出され、防寒対策のないままの病後の冬、その暖かいお心づくしが今も強く印象に残っています。

きっと、このようなおやさしいおくさまのお心が、先生のきびしい学生生活や、牢獄での抵抗のご生活を支えてきたのだと思っています。

その後、二十余年を経て、京都府立総合資料館で開催された先生の遺品展と記念会に出席しました。

また、折にふれて散策する疎水べりの法然院に立寄ると、きまつて先生御夫妻のお墓にお詣りします。

身の丈より大きい仙台石の歌碑を仰ぎながら、繰り返しお歌を拝讀いたします。

たどりつきふりかへりみれば山川を

こえては越えて来つるもの哉

『獄中贅語』や『自叙伝』、『貧乏物語』など、ときおり読み返すのも私の楽しみの一つです。

現在は、京都府農林行政の中で、農村婦人労働の問題や、農業者の生活を少しでもよくしてゆくための仕事をしています。

農林漁業で働く人達の健康を守り、婦人の組織化をはかることなどです。

下積みの人たちが、自己のおかれている立場を認識し、目ざめることによって、生き生きと働くことが出来る目があること。

解放の日を目ざして、小さな努力を積み重ねている毎日です。

複雑な社会情勢の中では、ともすれば自分だけの幸せを求め、金銭や物に振り廻される生活になってしまします。

おしつぶされていく日本の農業を守ること、農民と労働者の共通の幸

せを追求するため、ささやかな積み重ねの大切さを痛感する日々です。そして、このことが、河上肇先生の切り拓いてこられた思想と理論を実践する何程かにつながっておればと思っています。

行き暮れてけわしき山河越え来しに

『獄中贅語』吾にありたり

「科学性とヒューマニズムの結合」を

引き継ぎゆかむ生けるしるしに

万紀

(京都府農林部 専門技術員)

河上先生の思い出

吉田 泰三

私は昭和三年四月から昭和四年十一月迄丸太町通川端東入平塚薬局に住込店員として働いた。薬局主は京大医学部附属病院の薬局の副長をしていた経歴の持主で、そうした関係で大学教授のお得意が沢山あった。入店間もなく息子の武士さんの案内で最初の得意廻りに出掛けた。岡崎方面を皮切りに鹿ヶ谷を一巡、吉田山の上を三軒程廻り坂を下って最後に訪れたのが二本松の河上先生のお宅だった。丁度玄關を出たところで武士さんがこっそりと「この先生睨まれてはりますね」、当時の私はマルクス主義について全然門外漢だけれども別段驚きもしなかった。

一ヶ月に御用聞きは二、三回で、薬といったら先生が常用されていた鎮静剤バイエルのアダリン錠二〇錠入、一ヶ月に一、二ヶと固練の棒状洗濯石鹼が二、三本という御注文であった。或る日のこと偶々合所に奥さんがおいでにならず、声をかけると障子の向う側で「平塚さんだよ」とよく聞き透る声で、先生でした。この声は今でも耳底に残っている。

夏のお盆の祝儀を五円頂戴した。これは出入の御用金全部です。昭和四年には先生も東京に転居され御用金は無くなった。

十一月頃に政治活動のため京都に來られた。宿舎は三条大橋西詰の萬屋であった。いつもの如くアダリン錠二ヶの御注文で早速に御届けした。宿の玄関には背広の紳士が二人控えていた。番頭に来意を告げるとすぐに奥さんがいつもの優しい笑顔で出て來られた。

日は不詳だけれども岡崎の公会堂で先生の演説会が開催された。

当日は早目に入場し前の方に席をとった。先生が登壇される数分前凡そ十人程の労働者らしいのが前方の椅子に座り込んだ。護衛のためだと解った。

そのうちに先生の登壇となり何か二言三言しゃべられたが、何を言われたのか少しもわからない。金モールに向つての応答があり中止となつて降壇された。あつけにとられがっかりした。あとの演説を聞くのもそこそこに帰路についた。

これが先生に御目にかつた最後である。

それから私も昭和五年頃からプロエス運動をやり始めチヨッピリ乍ら眠まれるようになった。

私と河上肇

石井公代

私は大正十五年山口高商卒である。従つて河上会の方の皆さんのように河上先生から直接の指導を受けた者ではない。が、先生の著作を愛好すること、先生の風格を敬慕することに於ては誰にも負けない一書生のつもりである。先生が書かれた物は学生の頃からその殆んどの物を熟読し、又先生に関する評論の如き物も残らず精読しておる。

私は一回だけ先生のご風貌に接したことがある。それは私が福岡にい

た頃、先生が大山郁夫等と新労働党を結成してその遊説に來られた時のことである。先生は羽織袴の姿で演壇に立たれて、開口一番「量から質への転換」を大きい岩を転がす例で説かれたが、一分間も話さない内に臨場の警察官によつて「弁士中止」を命ぜられた。私は呆氣にとられて、先生が二人の私服刑事に両腕を採られて退場される後姿を悲しく見送ると共に、その当時の言論の自由の無い弾圧の厳しさを慨嘆した。

先生が愈々共産党に入党して地下に潜られ時、私は血の氣が引くような戦慄を覚えた。それは先生があのお老齢と瘦躯で地下運動の激闘に堪え得るであらうかと思ふ憂慮と、豫て研讀したマルクスの理論を遂に實踐行動に移された先生の勇氣と情熱に対する驚きと称賛からの戦慄であつた。然し私はマルキストではなかったから先生の驥尾には附さなかった。その意味では先生に報ずる者ではないが、私が先生に傾倒する所以は、先生が辿られた実に真摯で果敢な生涯と、その書かれた物の明快な論理と比類稀な名文に対してである。先生の書かれた物を読むと頭が下がる。胸の悶えが取り除かれる。そして自らの生き甲斐を感じて将来に向つて生きる意欲と闘志が湧いてくる。

私にとって河上肇はそういうお方であるから、先生が亡くなられたことを知った時は痛惜に堪えず、早速仏壇にお灯明と線香を供えて長時間ご冥福を祈った。

私はその後大阪の某社に職を得て上阪した。そして昭和四十八年六月三日の朝日新聞の夕刊で、河上肇の遺品展が京都府立総合資料館で開催中でそれが明日までとあるのを見た。その日は幸い日曜日だったから妻と連れだつて參觀に出かけた。其処で受付にあった參觀者名簿に署名した。会場に陳列されていた先生の著書や原稿や遺墨は凡て私の目と胸に食い込んで來た。私は青年の頃から今日まで独りで私淑して來た先生に逢つたように思えて、いつまでも会場を立ち去りかねた。

それから私と河上肇記念会との繋がりが出来た。私は東京と大阪の会報が到来すると、何も彼もそっちのけにして一気に読了して先生を懐しむ。そして冬のさ中の法然院の会合はいつも非常に寒いけれども毎年出かけて行って、私よりも先生のことを良くご存じの先輩や良識達のお話に聴き入り、先生と奥様のお墓に詣り、あの有名な歌碑を仰いで帰ることにしてある。それらのことが私の現在の何よりの楽しみである。

河上博士の転機となった新労農党解党声明

喜多川 栄 三

偉大なる求道者河上肇先生には、残念乍ら私は一度もど在世中に驚嘆に接したことがありません。

私事に亘って恐縮ですが、私は昭和三年旧評議会解散後、元評議会系の大阪金属労働者組合の常任執行委員で、本部の常任書記をしていました。

当時同組合は、大山郁夫氏の新労農党設立推進運動の関西における中核体になっていたにもかかわらず、私は組合の長老達の目をかすめて若干の活動家を集め、秘かに半非合法の「全国協議会」の再建運動をつづけていました。

同組合の先輩同志達の多くは、福島区労働学校で河上先生の講義を聞いた、その講義の内容が組合内部の研究会でも話題になっていたもので、私にとっては、河上先生は日本のマルクス主義学者の最高權威で、雲の上の人のような存在でありました。

ところが、昭和四年十二月から翌年二月にかけての大阪鶴町所在のゼネラルモーターズのストライキがきっかけになって、大阪金属労働者組合はそれまでくすぶっていた新労農党支持派の安島、仲橋、飯石、小田

君等の長老派と、私達半非合法の全協派が分裂し、更に、同年六月に生じた岸和田紡績の争議が引きがねになって大阪の新労農党内に動揺が起こり、八月の某日新労農党の小岩井洋氏から地下潜行中の私に会いたいという連絡がありました。私は、小岩井氏指定の某弁護士（特に名を秘す）宅で小岩井氏と会いました。

小岩井氏は「労働者の党は確かに一つでよい。私達が新労農党を結成したのは間違いないでした。そこで、京都の河上博士とも相談しまして、近く河上先生と私の名で新労農党の解党声明を出しますから、大阪の私の方の組織を貴下の方へ引き取ってもらいたい」という申し出でありました。

その結果、私は自分が指導していた全協金属の組織を、同志峠一夫君に引き渡し、大阪の新労農党派の解消オルグとなって非合法組織へ吸収していきました。

その後、昭和六年の党のメーデーカンパで私は同志とともに逮捕され、その後の経過は別世界にいたので知りませんが、出獄後、河上先生が入党下獄された事を知り、先生は、あの新労農党解党声明を出しになった時から、ある種の覚悟をしておられたのではないかと想像されます。

先生は単なる書齋マルクス主義者ではなく、自己の学問と信念を身を以て実践された求道者だと、私は今日もお心から敬服しています。

（七十二才 天王寺綜合企業組合顧問）

河上肇先生を崇敬して

稲田 秀 爾

大東亜戦争の終りに近い頃、先生の御長男政男様が悪性の中耳炎が内耳に移り重症にお成りになり、遂に亡くなられた頃の事です。先生は書齋が二階でいつもお仕事をしておられましたが、なんばお忙しくても私

が診療に向うと必ず下へ降りて来られ、私の診療の仕方を傍で見て居られました。奥様は必ず経過や予後の事をお尋ねになりました。其頃は空襲警報が鳴ると夜は窓や雨戸のすき間から光が少しも漏れぬ様に闇幕を張ったのですが、僅に畳の上丈に光が落ちたもので、診療が済んで私が帰る時となると先生は必ず玄関まで出られて必ずキチンと座って両手を揃えて頭を深く垂れられました。当時京大の教授の御宅へは十数軒向うて居ましたが、玄関まで送って下さるのはよい方で、立って居て軽く頭を下げるぐらいのことでした。そんな時代でしたから私には非常に印象に深いです。

河上会の席上で昔誰かの発言で河上神社を造ろうじゃないかと発言された時に私は双手を高々と挙げて賛成したのでしたが其時は遂に果たしませんでした。日本の神社に祭っている神さんは西洋や外国で云うているゴッドとは全然別で日本の神さんは皆昔は人間で、人間の最高が神として祭られるのです。明治天皇も其内の一人で自分自身が本当に生きて居る時から其様に自負して居る人は本当にえらい、最高の人物だと思えます。北野の天満宮でも祇園神社でも日本の神さんは元は皆人間で人間の中のえらい人を神さんにするので比較的新しいのは伏見桃山の乃木神社です、乃木神社の造営に私は大分骨折りました。乃木神社の神殿に最も近い所にある神一対は私が献木したのです。今一つの献木は銀杏の木です。これはジェーン台風の時に折れて今は若木があると思えます。今からでも河上神社を造営する事は出来ぬものでしょうか。

(九十一才 耳鼻咽喉科専門医)

事務局より お願い

本特集をお読みになられて、お気づきのことや御感想など、事務局宛お寄せ下さい。

【第三回講演会】 講演要旨

演題 “河上肇と『貧乏物語』”

講師 杉原四郎氏（甲南大学経済学部教授）

一九七七年四月二日 京大薬友会館

一、『物語』周辺

『貧乏物語』は、河上の名を全国的なものにした記念碑的な著書です。大正五年に出版されたものが、戦後すでに三十年たつ今日でも、日本の若い読者層に読みつがれているという、河上の書いた本の中でこれ程息の長い本はない。ただ、『貧乏物語』は、それ自身としてかなりいろいろな問題を持った本なのです。たとえば、河上自身が非常な自信を持っていたにもかかわらず、ある時期自ら絶版した、そして生きている間は重版を許さなかった。それはいったいなぜなのか、ということですが、

それから、書物としての移り変わりも、非常に変化に富んでいると言えます。まず最初に大阪朝日新聞に連載され、それが本になる。その後改訂第七版が出、さらに絶版後も『社会問題管見』の中に上編と中編だけを入れたりしています。またそのほか、他の人の編纂によるものまで出ている、という風な具合です。最近、天野敬太郎先生が、初めて『貧乏物語』についての本格的な書誌学的な調査をされるまで、我々には『貧乏物語』のいろんな版の違いが、よくわからなかったわけです。

もう一つ、どうしてそれが弘文堂から出たのか。これも今までよくわからなかった。そもそも河上と弘文堂との出会いは何だったのか、自分が非常な自信を持って書いた原稿を、どうして無名の弘文堂などから出したのか、というのが疑問だったのです。この点については、脇村義太

郎先生が非常に詳しく調べておられます（「『貧乏物語』前後」『世界』）。そういうお仕事で、『貧乏物語』の出版事情がよくわかってきたのです。

ところで、『貧乏物語』の装丁はいくつかの種類がありまして、これがまた一つの特徴となっています。脇村先生の論文（前掲）の中に、『貧乏物語』を、日本の出版史上記録的な成功に導いた一つの理由は、装丁にある、ということが書かれてあります。この装丁というのが、当時の出版物の中で非常に新しさを感じさせるものであった。しかも、内容とよく調和を持つものであった。これが、成功の一つの理由だと指摘しておられます。

二、『貧乏物語』

『貧乏物語』は、上編・貧乏の事実に関する叙述、中編・貧乏についての理論的な叙述、下編・貧乏退治の政策に関する叙述の三部に分かれています。この中で、河上の筆が最も冴えて人をひきつけていくのは、上編だと思われたい。そこできょうは、この上編に最も力を入れてお話ししたいと思います。

上編では、現在文明国に如何に多数の貧乏人がいるかということ、イギリスのブリス、ボレーイ等のいろんな調査を紹介しながら述べておられる。ここで河上は、まず貧乏の定義について書いています。貧乏には、①分配の不平等からくるもの、②法律で救済を受けているもの、③人間として身心の条件すらととのえることができない所得しか持たぬもの、の三種類があるが、ここで問題になっている貧乏とは、第三の意味の貧乏なんだ、と言っています。ところが、貧乏の具体的な叙述になると、イギリスの事ばかりが出てくる。この点について河上は、日本には信頼すべき調査がないから、働けど働けど食えない程の貧乏人が、どれ

だけいるかわからないと書いているんですが、やはり少しの疑問が残ります。

なぜ河上は、日本の事を書かなかったのか。福本和夫氏などは、河上のそういう態度を定義主義・公式主義だと激しく批判していますが、私は、その理由として、少なくとも次の事は言えるんじゃないかと思えます。一つは河上の言うように、当時の日本には、社会統計学的方法によって本格的に調査された、客観的な資料がなかったということです。ところがイギリスにはそれがある。だから、イギリスの事を多くとりあげたのではないかと思うのです。それともう一つは、世界を支配している最も富める国イギリスにすら、これだけの貧民がいる。それを言いたかったのではないでしょう。たとえばマルクスが、明日のドイツはイギリスである、だから具体的例証として、イギリス資本主義のデータを使うと言っている。河上も同じ考えだったのではないかと思います。

河上は、A三の二Vの終わりで、身心を健全に発展させていくための条件すらを欠いている貧乏、気持一つでは全くどうにもならないような貧乏、それが問題であると再度念をおして、貧者必勝的な考え方を排除しています。そしてそのあとA四の一Vで、イギリスの養老年金条令を紹介して、年金を受けることを権利として認めたということは、我々の特に注意すべき点である、そういう思想の大きな転換、これは非常に重要な事だと強調しています。『貧乏物語』は、大正デモクラシーのさなか大正五年に発表されたのですが、その中で、イギリスの養老年金条令は、近代の権利思想上特に注意すべき事だと日本の読者に力を入れて紹介している。この点は、やはり大きな意味を持つのではないかと思います。

中編は、貧乏という社会現象の発生の根拠をどこに求めるかという、理論分析の章です。ところがこの中編は、量的に最も少ないばかりかそ

の前半はというと、昆虫の話とか人類の発生、脳の話などが詳しく書かれていて、なかなか本題へと進まない。

河上は、ここで何を言おうとしたのかといいますと、結局、人間と動物との違いをどう見るか、ということなんです。人間が足で立ち手が自由になることによって、道具を知りさらに機械を創り出す。そういう、いわば労働手段を用いて具体的に生産するというのが、人間の生産力を非常に大きいものにした。にもかかわらず、なぜ貧しさはあるのかと問いかける。そして、それは可能性として出てきた高い生産力が、現在の商品経済によって実現を阻まれているからである、と話を進めていきます。つまり、商品として販売されるには、それに対する有効需要がなければならぬ。ところが、貧乏人というのは所得が非常に少なく有効需要を創り出さないから、生活必需品へはこの豊かな生産力が向かない。これが貧乏の理由なんだと言っているのです。

下編では、貧乏退治の三つの解決策が考えられています。①社会関係を根本的に変える、②富者がぜいたくな暮らしをやめる、③事業者が社会的責任に目醒めて生産するように努める、というものです。

そこで、近代の初めからの、利己心と利他心の経済思想（スミスとマルクス）の両方の思想的な説明を筋にして話を進めていきますが、要するに河上の言いたかった事は、精神の改造と制度とは両方とも必要なんだ。が、制度よりもむしろ人間の方が必要なんだ、より基本的なんだ、という事なんです。金持ちがぜいたくをやめ、経営者が公共心を持って事業をするなら、貧乏の問題は基本的に解決する、という非常に精神主義的な結びになっています。

こういう主張に対しては、柳田民蔵・堺利彦等から非常に厳しい批判が出され、河上も後にそれを認め撤回します。

注 福本和夫 『革命回想』第三部 インタビュー刊参照

三、むすび

河上は、どういう思想の下に『貧乏物語』を著したのか、これは興味ある問題だと思います。

それは、一語で言いますと個人主義、それと社会主義なんです。しかも、その社会主義も、あるところでは国家主義と言っている。たとえばA十の三Vのところ。河上はここで、ドイツの戦時統制経済を国家主義と言おうが社会主義と言おうが、それは結局名の争いのみである、「名の異なるをもってその実を怪しむがごときは、おそろく識者のなすべき事ではなからう。」^注と言っているわけです。こういう河上のとらえ方は、ちょっとユニークですね。それから、統計数値を利用してはいませんが、金持ちと貧乏人とを区別する以上の用い方はしていない。だから河上にとっては、議論が人間と人間との関係としてしか展開しないんです。経営者に対して、公共心を持って事業をなさうと言っけども、そんな事をしていれば、資本の運動の中では競争に負けてしまう。気持一つで経営方針を変えていく事が許されない、それが資本主義体制なんだ。そういう事ができるようにするために、まさに資本主義体制を根本的に変えなければならぬのだという認識が、河上には全然なかったのではないかと、という疑問があるのです。

河上は『貧乏物語』に対する批判を受けて、大正八年以降『社会問題研究』という雑誌を出しながら『資本論』の研究を本格的にやり始め、『貧乏物語』も絶版しています。このあたりから、社会学者として資本主義体制の運動法則を追求していく、という段階へ移っていった、ということになると思います。

注 河上肇 『貧乏物語』 岩波文庫（青）一三二―一 一〇頁

（文責 事務局）

東京河上会と河上肇記念会

との統合問題について

大門 英太郎

前号に報告した通り、この問題は東京河上会からの申出に初り、昨年二月三日、小生が東京の要請で上京、学士会館で東京河上会の幹事諸氏から方針を承り、年を越えて本年二月一六日、東京河上会の総会席上その改組と記念会と統合して再出発が決議されたのであった。さて其後の具体化については四月二二日野口氏が薬友会館の記念会例会に出席、東京河上会の実情と統合の方針を説明され、次いで四月三〇日小生が上京、学士会館で白石、小林（直衛）、堀江、野口の諸氏と会談、統合と生誕百年記念行事について諸般の打合せをしたのであるが、越えて七月二〇日上京の際、野口、生沼両氏に面談した所、東京河上会の幹事諸氏の二月一六日の総会決定の解釈が必ずしも一致しておらず印象をうけた。又其間、病床の小林直衛氏から小生に一日も早く統合の実を上げる様努力してくれとの督励があったのであるが、結局、八月九日は非会い度いと申入れて白石会長とお目にかかった所、今暫く現状のまゝで、来るべき生誕百年記念行事の共同計画共働の過程で統一の実をあげて行き度いとお話であった。

もとよりこの問題は東京河上会からの申出から初った話であつて河上肇記念会としてはとやかく言うべき問題ではないので、従来通りの相互の協力と特に生誕百年記念行事への共働を約して来た次第である。

右様の経緯でこの問題は暫く現状維持という事に決着、会員諸氏の御了承を得度いと思ひます。

事務局だより

◎当番日記

二月一六日末川先生没、一七日通夜、小泉民次、安井、森田、大門靈前に供花・一八日末川先生葬儀・一八日午後六時大阪梅田好文クラブに於て例会、講師相沢先生・三月一四日福井先生葬儀・四月八日住谷先生訪門、世話人代表就任を承諾して頂く・四月二二日千福園習習、京大白川会と共催・午後六時三〇分薬友会館に於て例会、講師杉原先生・四月三〇日東京学士会館に於て白石、堀江、小林（直）、野口、大門統合問題にて会談・五月二七日安井、大門住谷先生訪門・七月二〇日東京鉄鋼ビルに野口、生沼、大門会談・六月一八日法然院に於て福井先生追悼会、供花・八月一三日安井、大門末川先生初盆参詣、住谷先生訪門、一彦先生と会談・八月二五日学士会館に於て野口、生沼、大門会談・九月六日大塚有章氏訪門例会講師依頼・九月一四日服部周平氏葬儀松坂西方寺、大門参列・二〇日津市文化会館に於て服部周平氏合同葬、供花、弔辞。

◎恒例習習懇親会

今年も京大白川会との共催で会員小泉氏の洛西千福園で懇親会を持つ事が出来た。九十翁福田国手の相変らぬ御元気なお話や東京からの参会もあつて好天にめぐまれた楽しい一日であつた。終了後、薬友会館で杉原先生を講師に例会を持った。いさゝか会としてはハードなスケジュールの一日であつた。出席者芳名、住谷悦治、福田秀爾、児玉誠、小林寛、田村敬男、吉田吉太郎、清水重男、平沢俊男、野口務、杉村乾、澄川英雄、河本正次、津田政男、小泉秀三郎、斎藤栄治、小椋美与士、持田寿

一、杉崎三八郎、山下孝次郎、相沢秀一、相沢夫人、小泉仁一郎、大門英太郎（順不同）

◎再び当会の財政などについて

前号でも余り余でない当会の金庫の中味を御披露しましたが、今回もまた一言。

卒直に申して、前号の「お願い」は余り聞いていただけなかったのではないかという感じが致します。前号を六月中旬に郵送申し上げてから十月五日の現在までに会費を納入下さいました方は、四八名、以前の方も含めて一五三名（会報郵送数八五六名）。依然として贈呈分が圧倒的に多いわけです。

ちなみに、今回の第四号の発行費は次の通りであります。

印刷費	七五、〇〇〇円
郵送料	一一一、八〇〇円
封筒代	四、〇一〇円
取材費（原稿依頼、督促郵税他）	七、四九〇円
（合 計）	二〇八、三〇〇円

当会の拡大・発展のため、会報の会員（『会費納入者』）以外の方々への郵送は、今後も続けていきたいと思っております。

またお約束通り、今年中にもう一回会報を発行する予定でありますし、二年後に迫った生誕百年記念事業の準備にも取掛らなければならない折柄、甚だ勝手ながら、何卒、御入会或は御寄付の御芳志を頂戴できますれば、幸甚に存じます。（その節は同封の郵便振替用紙を御利用下さい）

◎入会のすすめ

当会は、昭和四十八年設立され、「河上肇博士の人格を讃え、これを広く永く伝える」目的を持ち、河上肇博士を敬慕し、博士に学び、博士を知ろうとする人々の集まりであります。

博士の教えを直接受けたと否とに拘らず、年令、学歴、性別は固より、政治的立場の如何を問わず、年会費三、〇〇〇円を納入下されば、何方でも直ぐ会員になれます。何卒この機会に御入会下さるようお願い致します。

なお、入会御希望の向きは、同封の郵便振替用紙をもって、会費として三、〇〇〇円御送金下さい。

主な活動

- 一、毎年十月 京都法然院にて総会
- 一、年四回 （一、四、七、十月）会報発行
- 一、年六回 （二、四、六、八、十、十二月）講演会をかねた研究会開催
- 一、その他随時、研究会、懇談会を開催

出版物

- 一、『河上肇遺品展図録』（昭和四十八年刊行）一、三二〇円（送料共）
- 一、『京都府立総合資料館 河上文庫目録』（昭和四十八年刊行）非売品
- 一、『河上肇歌碑拓本』（昭和五十一年刊行）三、四五〇円（送料共）

※御希望の方は事務局まで連絡して下さい。

【新刊紹介】

一海知義 著

河上肇 詩注

当会会員、一海知義氏（神戸大学教授）の手により「河上肇の、今日見出し得た限りのすべての漢詩を収録し、それを読み下しと懇切な注釈・解説を付した」書が、今度（十月二〇日）岩波書店より発刊されました。会員諸氏に一読をおすすめします。

（岩波新書 二八〇円）



編集 雑感

—後記にかえて—

★参議選だ／何だと云っていたがもう十月である。早いものだ。

さて、編集後記を書くことになったのであるが、とりたてて書くことが見あたらない。ただ、云っておかねばならないことは、本誌に集録した杉原四郎先生の講演テープを文章化した作業の話である。この作業は当初、私が担当していたのであるが、私のやったのでは不十分であつたらしい。それを事務局の中井氏に依頼した所、卒論や就職で走り廻っ

ていて多忙な中にもかかわらず快く引き受けてくれたことである。本誌集録分はその要約であるが、正味原稿用紙（四〇〇字詰）六〇枚と云う膨大な作業に対しこの場を借りて改めて敬意を表したい。

（T）

★冒頭のハ：意外であったVは、編集部の方直な驚きである。

学者指向からの離脱を試みることは、しよせん冒険でしかないのか、否か。世代交替のみならず、その指向性もが問われている情況に、この特集を組んだのは、それを確めるためであつたと思う。そして記念会の得たこの意外さ、それをどう受け止めるべきだろう。

多くの「河上ファン」からの便りは、在野に散る河上ファンの中に、彼への想いが、どれほど強烈に生き続けているかの叫びに似ないだろうかと思う。

河上との「問答」は、今始まりつつある。河上へのラブレター（いささか俗っぽい）が、彼への想いをどこまで伝え続けることができるのか。それを見届けるまでは休めない。こう思うのは、私一人だけであろうか。

（N）

★十月七日、本誌の校正ゲラを受けとりに京都のK印刷所へおもむいたのであるが、この日はちょうど小生が当会事務局への参加オルグをO・S両氏から受けてちょうど一年を迎えた日であつた。考えて見れば小生が当会の機関誌のゲラを受けとりに行くはめになったのも、一〇代・九〇代の会員からの便りが行かせたものなのであろう。「ナンデ、オレガミ」と叫んだ所で、全国から寄せられた「河上ファン」の原稿は小生に對し、無言のプレッシャーをかけているのである。

このプレッシャーを、今度は事務局側は当会発展の指標として考えた。少なくとも小生はそう思っている。本誌の編集を通じて、「機関紙（誌）は組織者である」と云った偉大な革命家がいたが、この言葉の正しさを、再認識せられました。

（M）

七十七年度 総会 御案内

洛東、法然院の秋が今年も参りました。

河上肇記念会の総会を、左記要領で開催いたします。さきに

代表末川先生、河上先生の直弟子、石川、福井両先生を失い、
とみに寂寥、併せて追悼の誠を致し度いと思います。

本年は特に河上先生の義弟、大塚有章氏を招き、あの狂瀾怒
涛時代の想出話を聞かせて頂く予定です。

河上先生の霊前で、秋の一日を語り合うではありませんか。

一、日時 一九七七年十一月三日(日曜)

午前十一時～午後三時

一、場所 鹿ヶ谷 法然院 (別図参照)

一、臨時会費 二、〇〇〇円(会場費、昼食費を含む)

奮って御参加下さい。同封ハガキで十一月三日までに欠の
御返事を願います。

河上肇記念会

世話人代表 住谷悦治

1. 鹿ヶ谷法然院へは左記の交通機関(京都市営バス)でお越し下
されば便利です。

◆国鉄・近鉄京都駅→45番 銀閣寺行(法然院町下車)

◆京阪・阪急四条河原町駅→32番 銀閣寺行(法然院町下車)
47番

◆京阪三条駅→5番 岩倉操車場行(浄土寺下車)

2. 地方より参加なされる会員

の方で宿泊希望の諸氏は、同
封はがきで事務局までお申込
み下さい。

◆対寮日

十一月十二日及び十三

日(一日でも可)

◆料金 一泊三〇〇〇円

(朝食付)

◆宿泊 ペンション下鴨

